

洲崎青年団と その資料について

本年度、横浜市史資料室は金沢区の洲崎町内会より、関東大震災後〜太平洋戦争期にわたる「洲崎青年団関係資料」の寄贈をうけた。その点数は一〇〇点にすぎないが、農村の青年団とは趣きを異にした活動が垣間見えるものであり、興味深い。

資料を受納するに先立ち、本年二月一九日（日）、洲崎町内会館において、町民向けの資料披露会が催された。朝一〇時から午後三時まで、この催しを聞きつけた洲崎町民の方々が来館し、実際の資料を手に取り、内容を確認し、自らの父親・祖父や親族の名前を見つけては声をあげていた（図1）。この資料の存在を知らない方も少なくなく、町内会の役員をつとめる数人が、資料の散逸を防ぐため、町内会としての意志を統一して、市史資料室への寄贈の合意をはかっていただいた経緯がある。小稿は、後世の洲崎町民に対して資料の寄贈と保管の経緯を知らせることを目的に認めるものである。

「若連中」から「青年会」へ

かつて「青年団」というものが存在した事実を体験的に知っている世代もいれば、知識程度にしか知らない世代もいる。若くなればなるほど、「何？それ」の反応だっでありうる。

近代日本の青年団は、近世の青年集団である「若連中」「若イ衆」の伝統をひく地域の組織である。「若連中」は、一〇代後半から三〇才前半ぐらいまでの男子によって構成されていた。近世のムラやマチの中核には神社があり、その氏子組織が「若連中」の母体であったことから、寄り合い場として神社に集まり、あるいは「若者宿」を建てる場合もあった。若者たちは、日常の生業に従事する時間をさけて、夜間とともに過ごし、夜警や緊急出動に備えた。年齢集団のなかでは、先輩が後輩に対して、地域での守りごとや、農商業などの職能上の技術の伝習もおこなわれ、地域で「一人前」となる訓練の場となった。そしてなによりも「若連中」は祭礼の担い手であった。

「若連中」の内部には、年齢的あるいは地域内の階層に根ざした統制があったことから、これを破る者に対して、制裁がなされることがしばしばあり、「蛮風」としてとらえられることが少なくなかった。また、母体となる氏子組織の閉鎖性はそのまま「若連中」にも引き継がれ、往々にして他所との争論をひき起こすことも蛮風のひとつであった。

明治二一（一八八九）年公布の市制町村制により、行政上の「村」（行政村）が成立し、近世のムラやマチの自然村は「字」として行政村の一部となるが、それでも生活上の基盤である自然村は温存され、独自性を保っていた。

そのようななかから「若連中」の蛮風を改良して、新しい時代に対応しようとする動きが、青年層や地域の篤志家のなかから生まれ、その一部は「青年会」と名乗る集団へと変わっていった。「青年会」は、小学校教員を招いた夜学会や講習会などを開き、教養を積んでいった。

二〇世紀初頭、日本は日露戦争に勝つたものの、戦費のばく大きに比較して賠償は乏しく、戦後の租税負担として地域に重くのしかかった。一方で都市の工業化が本格化し、地域を

離れて賃労働者化する若者が現れる。ムラやマチで生まれ、そこで育ち、成長していくライフサイクルが普通であったものが、流動化することとなった。このような状況を背景に、内務省と

文部省がそれぞれ地方自治の強化と青年団体の善良な発展を企図した指導を開始する。模範的な優良青年団体の事例を紹介して、行政村に有効な、具体的な取り組みを全国に普及させていった。明治四三（一九一〇）年には、名



図1 洲崎町内会館での青年団資料展示会の様子 平成29年2月19日 洲崎・岩淵栄一氏提供

古屋市で全国青年大会が開かれ、全国の青年が一堂に会する催しもたれた。このように青年団体が政治的・社会的に期待を集め、各地の青年団体の活動についての情報が伝わるなかで、横浜地域でもいくつかの実践事例が確認されている。大正初期の磯子青年会による、磯子〜岡村間の新道建設や、大正三（一九一四）年五月開通の柴青年会主導による、柴〜寺前地区をトンネルで結ぶ里道建設などである。（平野）記

念絵はがきの世界』『市史通信』第二七号、『蒼穹の下魚鱗耀きし地 柴漁業協同組合史』(一九九〇年刊)。公道を公費のみでつくるのでなく、青年たちの労働奉仕を組み入れることで、村費負担の軽減がもくろまれ、地方自治の強化と青年団体の発展が具体的に結びついたのである。そして、内務・文部両省の指導がすすむなかで、「青年会」はしだいに「青年団」と自ら名乗るようになり、行政村単位の「本団」活動に重心が移っていく。

明治神宮造営と青年団

全国の青年を動員し、有益な存在として社会的に認知させる契機となったものが、明治神宮造営奉仕運動であった。明治神宮の造営は、大正期の一大国家事業であったが、第一次大戦時、戦後の物価高騰と労働力払底によって工事が遅れた。その打開策として、内務省は大正八(一九一九)年一〇月、全国の青年団に呼びかけ、参加費自弁で上京させて、勤労奉仕をさせる方針を打ち出した。

勤労奉仕は一〇日間で、宿舎は用意する。朝夕の講習会と行事をおりむむかたちで、労力を提供させた。神宮内苑の造営奉仕は、大正一一年一二月まで続き、北海道から沖縄までの青年一八九団体、延べ一一、二二九名が参加した。このとき各地の青年団は樹木の苗を携えて参加し、これが植樹されて今日の明治神宮の森となった。

勤労奉仕は外苑工事でも継続して取り生まれ、戦後恐慌下の大正九(一九二〇)年三月から関東大震災直前の一二年八月まで、計一一八団体、延べ五三・一四名の参加実績を残した。この造営奉仕に参加した青年団員に対して外苑地区に土地が恩賜された。その土地には、青年たちが上京し明治神宮を参拝する拠点として、全国青年の募金をもとに日本青年館が建設され、前後して指導組織としての大日本聯合青年団が設立された。

神奈川は東京に接して地理的に近いが、神宮造営に参加する者は少なく、内苑工事では全国最下位の沖縄五二名に次ぐ五五名であった。それは津久井郡の青年たちであり、横浜市域からはなかった。また外苑工事に県下青年の参加はなかった。

表1は、神宮内苑造営の勤労奉仕に

表1 神宮内苑造営奉仕青年団

	府県名	団体数	人員数
400名以上	静岡	18	1,120
	宮城	13	774
	岡山	10	596
	岐阜	10	592
	秋田	8	484
	山口	8	472
	愛知・広島	8	459
60名以下	大分	7	414
	青森・岩手・長野・富山・高知・佐賀・熊本・宮崎・鹿児島	1	60
	福島	1	56
	神奈川	1	55
	沖縄	1	52

資料：『大日本青年団史』(1942年刊) p137-p139

参加した各県青年団数・員数を上位と下位について一覽したものである。東京と接する神奈川県の参加少数と同じように、遠方のため奉仕への参加数が乏しいと単純に位置づけられないことが分かる。東北では上位の宮城・秋田に対して、下位の福島・青森・岩手。九州では上位の大分に対して下位の佐賀・熊本・宮崎・鹿児島、といった次第である。

造営奉仕は、閉塞した日常の青年たちに、上京の動機を与えるイベントであり、指導者育成の側面もあった。加えて呼びかけに呼応した青年団は、ほんの一握りであったことも事実である。それでも日本青年館の建設という道のりを青年たちに与えたことの意味は、奉仕とその成果としての建築と社会的認知との三位を結ぶ、直接的・象徴的な取り組みであったことによる。

国家事業の遅延に際して、地元青年団を奉仕活動に駆り立てることへの積極的な意欲は、もっぱら指導者の意識に帰するところが大きい。参加員数トップの静岡県は、この造営奉仕を案出した造営局総務課長兼内務省書記官・田沢義輔の前任地で、田沢は安倍郡長時代に郡下の青年団を指導し、奉仕活動を実際に試行した実績があった。のちに田沢は「青年団の父」と呼ばれるが、安倍郡での実績をたたえる地元民は多く、そのような指導者の存在が参加実績に反映したと思われる。さらには、遠隔地である場合、参加

費用を青年たちがまかなえたとは考えにくい。篤志家の支援もあったであろうし、生業を空けることへの地域の理解もなくてはならない。青年団運動に対する地元の理解と指導者の有無。これが決定的に重要であり、地域の自主性を重んじることが、青年団に対する内務省・文部省の基本姿勢であった。

洲崎青年団員の構成について

洲崎青年団は、金沢町(旧金沢村)青年団の下位組織にある、旧村(大字)支部の一つである。昭和二(一九二七)年度の金沢町青年団の予算書に記された支部負担金によれば、金沢町青年団は七支部。各支部団員の概数は、野島一〇〇・洲崎五〇・町屋一五・寺前三〇・柴四五・谷津二二・富岡四五であり、洲崎は野島に次いで大きな団員数であった。

谷津をのぞく金沢町青年団の六支部は海に面しているが、すべてが漁村であったわけではない。漁撈中心の浦方は、野島・柴・富岡で、その他三支部の各村は江戸時代は「磯付百姓村」として漁業は食用・肥料用にかぎり認められていた村であった(平野「昭和期横浜漁業の歴史的前提」『横浜市史料室紀要』第七号)。浦方と磯付百姓村との関係は、その後まで地域のあり方を規定し、明治漁業法の下では、洲崎にわずかにウナギ漁が認められた以外、厳密な意味で漁民はその他三支部に存在しなかった。

表2 洲崎青年団員の職業別構成

	教師・吏員ほか			職工・工員など					工業・建設業			農水産		商業				運輸・社員・店員									
	教師	公吏	郵便局員	職工・工員・機械工	海軍工員	日本製鋼職工	湘南工機職工	石川島造船職工	日本飛行機職工	造船業	印刷業	大工・左官・建築業	土木請負	染物業	農業	海産業	商業	青物商・青果問屋	雑貨商	材木商	洋服商	行商	運送業	自動車助手	湘南電鉄員	社員	店員
大正9				1																							
大正10				1						1							1	1									
大正11		1		1					1						2	1			1								
大正12				4											2	1					1	1					
大正13				3											1						1						
大正14	1			2							1				1	1								1			
大正15															3	1	2										
昭和2					2										1	1											
昭和3			1	3														1									
昭和4	1			4	1													1									
昭和5				4	3						2			1								1					
昭和6			1	2	2							1					1					1					
昭和7				6							1						1										
昭和8				7																							
昭和9				10							2							1									
昭和10				2	3																						
昭和11				6		1							1												1		
昭和12				2																					1		
昭和13				7				2			1									1						1	
昭和14				4		7	1	1																			
昭和15				5																							
昭和16				10							3																9

資料：「昭和五年度以降 支部団員名簿」 註：団員が在団中に転職した場合、転職後の職業とした。

昭和五（一九三〇）年に編集された「昭和五年度以降 支部団員名簿」から、入団年度別に団員の職業構成を示した（表2）。記録上の精粗があり、確定的な数字とはいえないが、これによれば「海産業」はわずか1名で、「職工」「工員」「機械工」が圧倒的多数を占める。加えて横須賀海軍工廠の工具、そして金沢に進出した日本製鋼所など軍需工場の工具として具体的に記されている者もいる。農業者は昭和五（一

九三〇）年までは確認でき、それ以降の入団者はいずれも在団中に工具に転じている。このような職業構成の青年団は、農山漁村の青年団と比較して団結力を発揮することが難しい。仕事上の繁閑のサイクルが揃わない。また年長者からの技術や知識の伝承という青年集団の機能が十分に発揮できない、などの理由からである。そのためであろう、洲崎支部「大正

拾四年度 記録簿」によれば、大正一四（一九二五）年九月一日の集会は、関東大震災関連と思われる講演会が企画されていたが、「午後七時より講演会を開くはずの処、会員ノ出席者四五名にすぎず是非なく講演会は取止めとなる」とある。震災後二年にして講演会の流れ。講演者は不明である。この事態をうけて、九月十二日の幹部会では「支部会員指導に関する件」が協議され、会合の前にラッパをもって知らせ、幹部は点呼をおこない出席簿に記すこととした。このことは、翌年四月一日の「会員出席奨励ノ規定」として明文化され、「修養会、集会、事業等ニ出席優等者ニ対シ年度末ニ之ヲ表彰ス」として、正賞銀メダル、副賞銅メダルを授与して参会を促すこととして

いる。

洲崎青年団資料について

洲崎青年団資料は、合計一〇〇点であり、当室で再整理する以前に、洲崎町内会が仮目録が作成されていたことは、まことにありがたいことであった。

一〇〇点の資料とはいえ、神奈川県青年団連合会の雑誌『武相の若草』一〇冊（大正一四年二月〜昭和三年五月、不揃い）や、出征した団員からの封書・はがき類など約六〇点を除けば、文書・写真類は三〇点弱でしかない。仮目録の配列にしたがって、再整理を実施したが、以下主たる資料について簡単な紹介をしたい。



図2 洲崎青年団の『会誌』『青年』（表紙・「会誌綴」より）大正13年 執筆者各自が孔版原紙を「ガリ切り」したと思われ、統一した誌面となっていない。

青年団の活動の基本となるものは、規約である。「規約綴 洲崎青年団」（資料No.1）は、大正一三（一九二四）年「金沢村青年会洲崎支部規約」、昭和二（一九二七）年「金沢町青年団規約」などが綴られているもので、金沢村に町制が布かれる時期に青年会から青年団へと改称されたことがうかがえる。また、昭和六年「支部細則」もある。

「団員名簿」は、表紙に昭和四年度と五年度の記載のある二点（No.2・No.3）があるが、前者は単年度の名簿であり、後者は昭和五年度段階で在籍していた団員、およびその後加入した団員を書き留めたものである。氏名、生年月日、入団・退団年月日、備考（役員としての履歴等）が記されている。

「奨励規約及出席簿」と題した文書は、大正一五（一九二六）年度〜昭和一五

(二九四〇) 年度まで不揃いで六六ある(No.4~No.10)。これは、先述の「出席奨励ノ規定」によるいわゆる出席簿であり、年を追うにしたがって、出席率が高まる傾向が見てとれる。

「収支算決簿」(No.11)、「本団収支決算綴」(No.12)は、前者は洲崎青年団の予算決算書、後者は金沢町青年団の予算決算書の綴りである。

本資料でもっともまとまっているのが、「記録簿」と題された四点である(No.13~No.16)。記載内容は詳細とはいえないが、洲崎青年団の活動記録であり、大正一四年から昭和一四年まで記されている。

「会誌綴」(No.17)は、洲崎青年団が発行した「会誌」ないしは「青年」(孔版印刷)の綴りである。刊記が記されていないものが多いが、本文中の日付などから判断して大正一二年~一四年のもの。論壇・会務報告・常識科学・文苑・投書欄などからなり、団員みずから鉄筆で一文字一文字孔版原紙に刻んだ団誌で、当時の若者の思いがわかる資料である。1綴しか残っていないのが残念ではある(図2)。

「夜警日誌」(No.19~No.21)は、タイトル通り、冬季に洲崎青年団が取り組んだ夜警活動の日誌であるが、内容は参加者名と天候・感想などを記したも

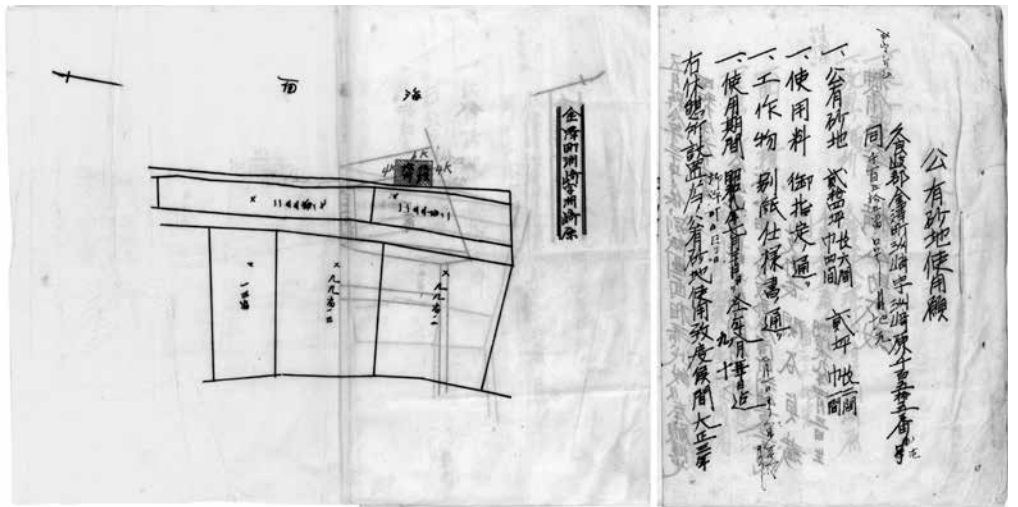


図3 洲崎青年団経営・海水浴休憩所の「公有砂地使用願」(「海水浴休憩所設置関係書類」より) 昭和9年6月30日

の。大正一四年・昭和五年と年不明の三点がある。

「海水浴休憩所設置関係書類」(No.23)は、昭和九年から一六年にわたる海水浴場休憩所設置の県にあてた許認可申請書類である(図3)。また、同時に理容師を雇い、理髪所も運営しているが、その契約書類も綴られている。洲崎青年団の海水浴場での活動は、「会

誌綴」でうかがうかぎり、大正十一年七月に「土地發展上避暑客等ノ便宜上乙艦海浜ニ海水浴公開脱衣場ヲ(男子部、女子部)二箇所設置ス」とあり、関東大震災以前から取り組んでいた事業であった。

写真類は「武運長久祈願」と題した、鎌倉鶴ヶ丘八幡宮での大判の集合写真(昭和一四年四月二十九日)(No.22)と、鎌倉大仏前での洲崎青年団音楽部の写真(ホテイ写真館見本)(No.86)／図4)の二点がある。音楽部は、金沢町の補助金で昭和一二(一九三七)年九月二三日に太鼓一・小太鼓一・銀笛一五を購入して発足したものであった。

資料の公開にむけて

本資料は、資料点数こそ少ないが、横浜青年団の一次資料としては貴重なものであることはいうまでもない。その理由の第一は、農村青年団の資料は全国的に数多く確認されていることに比べて、都市近郊青年団の資料は乏しく、職業編成からすれば都市型といえる事例であることである。第二には、支部青年団の資料であること。町村青年団が主体となっていた時代に、支部青年団(大字青年団)の活動が記録されていることである。これはおそらく、金沢町青年団が、野島・柴・富岡三支部の漁村青年団と、洲崎支部の都市型

青年団、その他谷津・町屋・寺前との団員構成に差違があり、統一的な活動がとりにくかったことに理由があるのではないか。

また、資料からうかがうかぎり、洲崎青年団には強力な指導力を発揮する者がいなかったのではないかと思われる。このことは後日精査したい。

この洲崎青年団資料を用いて、本年九月中旬から、ミニ展示「洲崎青年団とその時代」(仮題)を開催する予定である。資料そのものの公開は、団員名簿など個人情報保護を検討したうえで、すみやかにすすめたい。

(平野正裕)

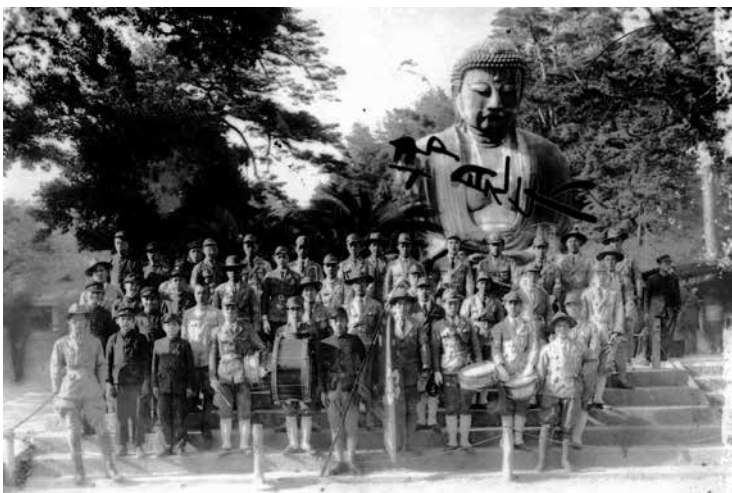


図4 洲崎青年団音楽部(鎌倉大仏前) 昭和14年3月か 音楽隊の鎌倉行進時の撮影とおもわれる。